

校長室だより

令和6年7月5日（金）
第 13 号
十日町市立中条中学校校長室

「認知能力」と「非認知能力」

最近よく放送されているある学習塾のCMで「認知能力」と「非認知能力」を紹介しているものがあります。その音楽が耳に残っている方も多いかと思います。私もその一人です。その教室のサイトには以下のように書かれています。

認知能力：知識や計算力など、テストの点数やIQ(知能指数)で数値化できる能力のこと。
非認知能力：自ら問題を解決していこうとする力、最後まで諦めずにやり抜く力など、数値化が難しい、見えない力のこと。

認知能力を支えているのが、この非認知能力といわれています。

未来は誰にも予想できません。VUCAの時代といわれる今、私たちの想像の範囲を超えた前例のない問題がこれからも発生するでしょう。そんな未来を生き抜くためには、既知の知識をベースに、未知の課題に対処していく力が必要です。その礎となるのは、自己肯定感のもとより、自ら主体的に課題を見つけ、解決しようとする力、最後までやり抜く力など、数値化することが難しい「生きる力」なのです。

引用 学研教室ホームページより

そのホームページには「身に付けておきたい10の力」を挙げています。

- その1 自己肯定感：他人の評価を気にせず自分を大切にできる
- その2 自己効力感：失敗を怖がらずに挑戦することができる
- その3 自制心：先を見据えて感情と行動をコントロールできる
- その4 柔軟性：自分と違う意見や変化に対応することができる
- その5 共感力：相手の立場に立って思いやることができる
- その6 協働力：他人と協力して最適解を見つけることができる
- その7 社会性：良好な人間関係を構築し、社会で役立つ一員となる
- その8 主体性：自分で考え進んで行動することができる
- その9 やり抜く力：自分で目標を決めて達成するまで頑張れる
- その10 回復力：困難な状況でも心を回復し、適応することができる



前号でも紹介した榎本博明博士の本には、以下のように非認知能力が説明されています。

非認知能力というのは、自分をやる気にさせる力や忍耐強く物事に取り組む力、集中力、我慢する力、自分の感情をコントロールする力など、学力のような知的能力に直接含まれない能力のことである。

いくら知的能力が高くても、やる気や忍耐力がなければ学力は向上せず、その成果としての成績も良くなるまいだろう。たとえば、宿題をやったり復習をしたりして、分からないことが多くて嫌になるようなとき、何とか分かるようになりたいと粘る子と、もう嫌だと投げ出す子では、その後の成績に大きな差がつくはずだ。

あるいは、知的能力がたとえ同じであっても、我慢する力があるかどうか、いわば衝動をコントロールすることができるかどうかで、成績に大きな差がつくはずだ。非認知能力の中核をなすのは自己コントロール力である。



学習塾のホームページも榎本博士の著書でも、身に付けさせたい力の表現に違いはあれど、すべて「非認知能力」に関わる力だと思います。これらの力をいかに身に付けるかです。

榎本博士は、幼児期に自己コントロール能力が育まれた子どもがその後の学力や社会的成功に結びつくとは言っていますが、中学生が幼児期に戻るわけにはいきません。しかし、中学生でも自己コントロール能力の向上を目指して取り組めば、その後の学業成績の向上につながるとも言っています。博士は「非認知能力である自己コントロール力がいきなり身に付くわけではない。そこで問われるのは『メタ認知』であり、モチベーションを高める方法を知っているかである。」と述べています。高める方法、その対応のヒントとして3つ挙げています。

1 自己責任制を意識する

勉強にしても、スポーツ、音楽にしても自分自身でやらなければとかやりたいという子と、人からやらされていると感じている子では、前者の方がモチベーションは高まりやすい。そこで大切なのは、人からやらされている感覚を捨てることだ。なぜ勉強するのかとかどのように勉強するのかを自分で考え、自分の責任でやるのだと思えば、モチベーションは高まりやすい。

自分が出した結果を自分のせいにするのを自己責任制という。たとえば、思うような成績がとれないとき、自分の頑張りが足りなかったと考える子は自己責任制が高い。一方、試験で予想外の問題が出たとか先生に嫌われているからだとか自分以外の要因のせいにする子は自己責任制が低い。これまでの研究の結果で、自分のせいにする子ほど成績が良い傾向が見られる。

2 結果が悪かった時の原因のとりえ方

失敗した時に、「自分には能力がないんだ」と自分自身の内的かつ安定的な要因のせいにしてしまうと、能力は急に改善できるものでないため、そう簡単にうまくいくわけがないと悲観的にならざるを得ない。そこでモチベーションが下がってしまう。

一方、失敗した時に、「自分の努力が足りなかったんだ」と自分自身の内的かつ変動的な要因のせいにした場合は、次ちょっと頑張ればうまくいくかもしれないといった希望が持てる。そうするとモチベーションを下げずに済むし、むしろモチベーションをあげることができる。

3 業績目標より学習目的を意識させる

モチベーションを左右するのは目標の立て方である。業績目標とは、成果を出すことで自分の能力を肯定的に評価してほしいという目標で、「社会のテストで良い成績をとりたい」などである。一方、学習目標とは「社会の歴史で江戸時代から明治時代への移行期についてもっと理解したい」というような物事をより深く理解することで自分自身の能力を高めたいというものである。

業績目標を持つタイプは、良い成績をとりたいという意識が強いため、どうしてそうなるかを考えず、公式をそのまま覚え、例題や練習問題を手っ取り早く使えるようにしようとする。成績につながらない勉強には興味がない。一方、学習目標を持つタイプは、しっかりと理解したいという思いが強いため、よく分からないまま覚えたり、使ったりすることに抵抗がある。応用問題や難問にもチャレンジする。

失敗した時や思うように成績が伸びない厳しい状況に置かれたとしても、周囲からの評価を気にして委縮しがちになる業績目標より、もっと分かりたいという学習目標の方が意欲を持って粘り続けることになる。

いかがでしょうか。少しでも生かせることがあればと思います。

